句集
星月夜
川端和子

伝へたき言葉あふれて星月夜

野を這つて響くホルンや夏氷河

初空を映し嬰の眸透きとほる

星屑の野に広がりて犬ふぐり

吉野窓開き新樹の風を聴く

花野来ていつしか夫を見失ふ

娘とともに雛飾るも小さき幸

娘に添ひし青年眩し風薫る

桃剥きし細き指もて嫁ぎゆく

娘の歌に夫は目瞑る雁渡し

初鏡覗くうしろの娘の笑顔

鳥雲に娘と新しき鍋を選る

婚の荷を春風に乗せ送り出す

新妻となりてそら豆剥いてをり

藍浴衣着て新妻の立居かな

恵方道娘夫婦の訪ね来る

読初は夫の一句の走り書き

速き歩の夫に草矢を放ちけり

雲の峰生きる証の句集生る

稿急ぐ夫の背中や雁来紅

夫生れし十一月の日の寧し

寄り添へば言葉はいらぬ冬銀河

惜春や詩人愛せしマンドリン

秋風をうながし詩人逝きにけり

冬銀河零るる詩を胸に受く

遠嶺より詩響きくる大旦

暁闇の海押し上げて初硯

曝書して誤植一つを見つけたり

母の手は白し大根なほ白し

石垣の息やはらかく黒揚羽

出刃一本浅蜊の桶に沈みをり

秋うららふだんの靴も旅の荷に

福耳の羅漢ばかりの日向ぼこ

牛の仔の人なつこくて木の芽風

ぶらさがりたき子に父の懐手

ももいろの仔豚の鼻や冬木晴

星涼しギリシャ神話の講座聴く

いつまでも蒼き地球を初明り

カシオペア嶺の鼓動を聴いてをり

青き星仰ぎて歩みゆく枯野

オリオンを掲げし一樹ありにけり

藤房の記憶や母の袖袂

冬うららソフトの似合ふ父なりき

父ありし日の岬あり卯浪立つ

母よりの雑煮の味を娘につなぐ

薺打つ母のリズムとなつてをり

白桃の雫二人の夜を充たす

夫と吾のそれぞれにある去年今年

重き荷をおろし新樹の香の中に

問ひかけし星の応ふる冬木の芽

句集　星月夜（ほしづきよ）　邑・第一句集シリーズV

二〇〇一年一二月二〇日　発行

著　者……川端和子

発行者……土橋壽子

発行所……邑（ゆう）書林
長野県佐久市新子田九一五―一　〒385-0007
電話　〇二六七（六六）一六八一
郵便振替　〇〇一〇〇―三―五五八三二

印刷・製本……株式会社シナノ

定　価……本体二四〇〇円プラス税

ISBN4-89709-370-8

ＰＤＦ製作　俳誌の salon